

火星



平成18年10月号

七曜抄 (三)

山尾玉藻

二百十日砂の海月の透きとほり

秋の蚊がオクラの花にゐたりけり

干し蛸の間に顔や秋の昼

鶺鴒の水に障子の漬けてあり

泡ひとつ抱へて秋の水馬

モツ煮込む女に小鳥来てゐたり

秋風に鼈甲飴の林立す

箸茶碗疾く片付けしきりぎりす

月白の蝟螂の首軋みけり

ぞんぶんに榎濡れてゐる良夜かな

太白星

柳生千枝子

薰風や梢より葉の光り出す
立夏てふ今未だ残る風邪心地
風渡る立夏の蝶の翅づかひ
螢ふと止まる少女の胸リボン
てのひらに螢のひかり息づける
夏立つや古き哀しみ忘るべく
白日傘表通りへ出てひらく

杉浦典子

大鍋に昆布ゆるびゆく土用かな
五日ほど夫に後るる夏の風邪

濃あぢさゝぬ鼓膜ぽこんともどりけり
指先に吸ひつきにけり蜘蛛の腹
シャーベット麓の街に灯のともる
夏椿けふの機嫌を問はれをり
母さほど遠くへ行かず昼寝覚

浜口高子

蜂の巢に裸電球灯りけり
赤蟻の昼の鵜舟を忙しく
風鈴の屋台去んだり水たまり
あぢさゝぬに六甲山の夜のかぶさり来
宙に擱みどころのありて蜘蛛飛びぬ
滝壺に降り込む合歓の花の雨
星合や来ないと言ひまた来ると言ひ

火星作品

山尾玉藻選

柎ひさかきを折ればたちまち夏の霧
八幡 大山 文子

男ぬしあたり吹かる鴨足草
花合飲に六甲の空低くあり

炎昼や大きなしつぽ過りたる

一山の茂り出で来し墨衣

妻入院さてと金魚の水替へる
豊中 廣畑 忠明

あつけなき夕立でありしバナナ売

新婚の二人去にたる雲の峰

空蟬や手抜かりのなき葬式屋

兄征きし日も花栗の匂ひぬし

水晶を蔵する山の夏霞
明石 戸栗 末廣

老鶯に白湯が欲しいか聞いてやれ
預かりし子のあつけなき昼寝かな

雨を呼ぶ風向きとなり栗の花
手をかざしました歩み出す凌霄花
焼香の列動くたびみどりさす
梅花藻に人通る橋かかりあり
祭提燈犬はさみしき貌をして
身ほとりに白い花増え祭くる
ガス管の地べたを這へり山の百合
うつかりと子をかまひたる暑さかな
クレヨンのすぐにはみ出す茂りかな
長靴が畦にぬぎある朝曇
灯涼し白洲次郎の外廁
武蔵野は影の濃かりし蛇の衣
庭花火しやぼんの匂ふ母入り来
緒の離れし臍を涼しと泣ける嬰
熱の子に七夕の雲疾く走る
夏満月象が睫をしばたたたく
かつこうや十字架の影石壁に

大和郡山
城
孝子

八幡
丸山
照子

宝塚
河崎
尚子

選のあとに

山尾 玉藻

炎昼や大きなしつぽ通りたる 大山 文字

窓を通り過ぎる何かの尻尾だけが見えた。「大きなしつぽ」であった。恐らくシェパードかコリーなど、大型犬の尻尾だったのであろう。しかし、見えたのは尻尾だけであった。もしかすると吉野の国栖人と同じ、人間の尻尾だったのかも知れない。こう思わせるのも「炎昼」という不思議な静けさ故のこと。

妻入院させてと金魚の水替へる 廣畑 忠明

妻を入院させると言う大事もやつと終えた。一瞬空虚感を覚えたが「さて」と気を取り直し、「金魚の水」を替える。入院と言う一大事に対し、金魚の水を替えると言う行為は瑣末である。これが俳諧である。俳諧とはさびしさでもある。

水晶を蔵せる山の夏霞 戸栗 末廣

作者の生地、山梨は水晶の産地として日本一である。その為か意外にも山梨には宝石に関する仕事をする人が多い。作品として見る場合は、「水晶」と「夏霞」との取り合せの句であるが、作者にとつては紛れも無く現実の中の写生句である。

祭提灯犬はさみしき貌をして 城 孝子

表現的には、やや理を感じ、納得し過ぎるくらいはある。しかし、祭と言う行事の為に、犬にとつては、かまつて貰えないことや、「祭提灯」など普段と違う風景がある。犬にとつて関りの無いことではないのである。事実、「さびしき貌」をしているのである。

うつかりと子にかまひたる暑さかな 丸山 照子

先ず大いに納得する。誰もが体験しながら、今まで誰もが句にしなかったことを一句に完成した時、俳人としての醍醐味がある。掲句は正にそう言う句である。殊に季語「暑さ」が良い。表現も簡潔明瞭である。

緒の離れし臍を涼しと泣ける嬰 河崎 尚子

私の長男が八月生れの為、この時期の妊婦の大変さはよく解る。そう言う下地があることも知っておくと良い。また胎児の形の窮屈さも暑げである。「臍」とは即ち嬰の身体そのもの。この省略が良い。表現はやや散文的に見えるが、最後の「嬰」一字によつてこの句はしっかりと切れている。

金亀子つるめば風に拭かれをり 深澤 鱧

「金亀子」は兜虫や鍬形ほど大きくないが、羽は平滑で黒く、光沢のある昆虫である。言い返れば強靱な体形である。蟻蛸や蟻螂が風に吹かれるのは普通だが「金亀子」は珍しい。「つるむ」と言う行為は、子孫を残すために最も大切な行為。この時ばかりは「金亀子」と言えども無防備となる。

恒星圈

堀 志皋

廣畑 忠明

松 たかし

寝る嬰の唇動く団扇かな
老人のハイカーに増ゆ秋あかね
万緑やいささかはある恋心
緑蔭のベンチに小さき赤鉛筆
魚跳ねる外なにもなし合歓の花

畦道に人沈みゆく青田かな
羽抜鶏あつき目頭してをりぬ
これからの日日を思へり螢草
瑠璃蜥蜴ひたりと止まるまた止まる
蟻の道夜みちとなりてゐたるなり

深澤 鱻

丸山 照子

鯨のとれとれ鋸屋根の町
銀山の案内滴りをりにけり
枯池や滝のあるかに水分石
溝浚へお百度石のうしろから
ジンギスカン鍋に鏝うく夏薊

卓の上の聖書あぢさゐ明かりかな
ぼうふらの育つ山上駅の壺
七月の風のバージンロードかな
天空のベッドきしめり避暑ホテル
羽蟻湧く人工島に日の差して

獅子座

山尾玉藻推薦

河崎 尚子

前髪をかき上げ掛けぬサングラス
虫が葉を食むを聞きをり朝曇
ほととぎすメタセコイヤから雫
十葉に座り込んだる帽子の子

大城戸みさ子

単身赴任のカバンに入れし江戸風鈴
鐘楼の磴を埋めたる桜の実
羽抜鶏ホースの水を駆け潜る
河骨のあぶくの生れし遠離子

山田美恵子

波音を背に手花火の火をもらふ
笹ゆりを思ふより影濃かりけり
青虫の遠嶺へ反るを殺さむと
棟梁と肩を並べるサングラス

福西礼子

清貧に生きる母の手すひかづら
待ちくるる母へ白玉作りをり
母の掌の金平糖や祭舟
コンビニの老人食や土用あげ

長田 暁子

傘寿となり夫
風蘭のうすむらさきや今日傘寿
風蘭の手入れ傘寿のピンセット
ていねいに風蘭掛ける傘寿かな
赤ワイン挙げて傘寿の日焼顔

蘭定かず子

つり舟の水を掻い出す夕焼中
鉾立の櫓を雨に寝かせあり
サングラスして家の中歩くなり
霧濡れの芝に沈める椅子の脚

藤田素子

長梅雨の風にまみれてパキラの葉
ところてん母に似てきて好きになり
朝曇カレーの匂ひ頭上より
今日できることは今日して蟬しぐれ